

長野市塩崎遺跡群出土
弥生時代ミニチュア土器

信州の遺跡

第20号

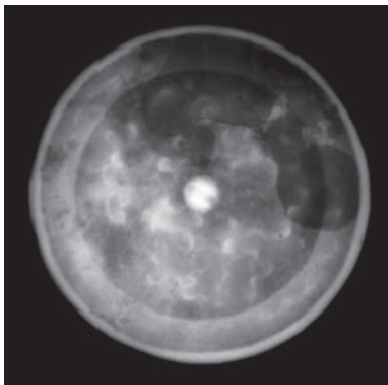
最新の調査成果から1

溝に区画されたムラ

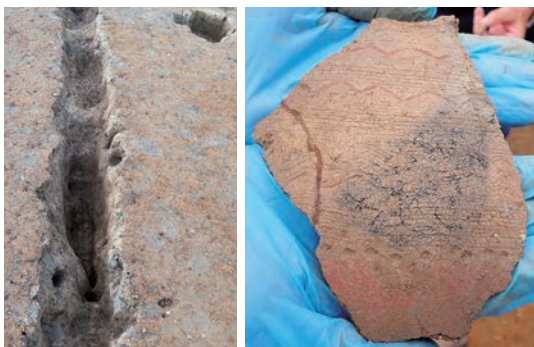
飯田市 にしうら 西浦遺跡

西浦遺跡は天竜川右岸の「低位段丘Ⅰ(中村面)」(『下伊那の地質解説』)上に立地し、土曾川右岸に位置する。南西方向に緩やかに傾斜する地形を基本とする。遺跡の東端は段丘端部となり、比高5～6mの段丘崖を経て、ママ下遺跡や堂垣外遺跡等が立地する「低位段丘Ⅱ(飯沼面)」に至る。

今回の調査では、古墳時代前期～中期の集落跡や、未周知の古墳の周溝がみつかったこと、平安時代後期の竪穴建物跡(SB107)から和鏡(写真①)が出土したことが大きな成果としてあげられる。なかでも古墳時代の集落は、柵木等の痕跡が溝跡(SD104)底面に確認され(写真②)、柵木列による方形の区割りがあったことが想定される。区画内には、溝跡と同一の軸方向をもつ竪穴建物跡や掘立柱建物跡が構築されており、遮蔽された空間に建物が整然と配置されている集落景観がみてとれる。竪穴建物跡(SB106)からは、古墳時代前期の特徴をもつ高坏やパレススタイルの壺(写真③)等が出土しており、構造面では、4本主柱穴を基本とし、土器埋設炉や間仕切り溝、鍛冶炉を想起させる強い熱を受けて硬化した炉跡を伴っている。なお、建物配置の基となる溝跡は軸方向を変えて2時期あり、溝跡は古墳時代中期の竪穴建物跡に切られている。



① SB107出土和鏡×線写真



左② 溝跡(SD104)底面

右③ SB106出土パレススタイルの壺

古墳時代前期の集落遺跡は飯田下伊那で5遺跡と少なく、しかも、今回の調査で発見された整然と区画された集落跡は、該期の集落構造を研究するうえで良好な資料となるだろう。また、調査対象地からは、見下ろす位置にママ下遺跡や堂垣外遺跡等があり、飯田市を象徴する風越山や座光寺富士(猪ノ山)を眺望できない。逆に、ママ下遺跡や堂垣外遺跡等からは風越山や座光寺富士とともに調査対象地を眺望することができる。こうした集落の立地環境も集落の性格を考えるうえで重要なことと考えている。

(上田典男)



西浦遺跡調査区全景(真上から 合成)

新発見の周溝墓群

飯田市 座光寺原遺跡



座光寺原遺跡における今回の調査では、^{ほうけいしゅうこう ぼ}方形周溝墓を3基検出した。周溝墓は、それぞれが隣接し、重複しない位置に造られている。規模は、全体を検出したSM2が一辺11m、三辺を検出したSM1と一辺のみのSM3が8mほどで、平面形は隅丸のほぼ正方形である。主体部は削平され、遺物の出土もなかったが、形状などから弥生時代後期に属すると考えられる。また、南へ50mの位置にある^{みやざきみなみはら}宮崎南原遺跡でも1基みつっており、一帯は広い範囲で周溝墓が複数造られた地域であることが確認できた。

調査区から150mほど東側には、弥生時代後期座光寺原式土器の標識遺跡となった座光寺原遺跡昭和37年調査地点があり、その周辺には同時期の集落遺跡が点在する。このことから本調査地は、これらの集落にかかわる墓域と考えられる。

(遠藤恵実子)



座光寺原遺跡調査区全景(上:北西)

特異な中世墓坑群

松本市 真光寺遺跡



真光寺遺跡は^{あずさがわ}梓川右岸の河岸段丘上に立地する。これまでに古墳2基と中世の火葬施設などがみつっている。なかでも、現真光寺の裏手、東約40～50mで発見された数十基の墓坑群は注目に値しよう。

多くは長辺70cm、短辺50cm以下と小さく、頭骨や歯のみが出土している。副葬品がなく時期は限定できないが、近接する全身埋葬の墓坑には^{こうぶつほう}洪武通宝が伴っており、大きな時期差はない中世と想定される。骨の残りが悪く断定はできないが、墓坑の規模からすると頭部のみを埋納した可能性が高い、特異な事例といえよう。

(寺内隆夫)



列をなして密集する小規模墓坑



墓坑底面近くから出土した頭骨と歯

最新の調査成果から 4

古代製鉄炉を発見！ 坂城町 上五明条里水田址

坂城町の上五明条里水田址は、千曲川左岸の氾濫原に立地する。これまでに、坂城町教育委員会や長野県埋蔵文化財センターにより何度も発掘調査がおこなわれ、古墳時代や平安時代の集落跡や古代から近世におよぶ水田跡等がみつっている。

令和3（2021）年度から開始された今回の調査では、平安時代後期の集落域から製鉄炉が検出された。当時、鉄器を生産するためには、千曲川などから運んできた砂鉄を木炭等と一緒に熱して原料となる鉄を取り出す必要がある。製鉄炉はこれに関連する遺構である。遺跡からは過去に鍛冶遺構等の鉄生産にかかわる遺構や、苧引金・紡錘車といった鉄製品も出土している。今年度の調査を含め、この地域の鉄器生産を考えるうえで貴重な遺跡となった。

（酒井実姫）

平安時代後期の製鉄炉



最新の調査成果から 5

ムラの中の鍛冶工房 長野市 篠ノ井南条遺跡

都市計画道路川中島幹線道路築造工事に伴い、令和4（2022）年5月30日から10月25日にかけて、篠ノ井南条遺跡の発掘調査を実施した。

本遺跡は、犀川により形成された扇状地の扇端部に位置する。平成15年度におこなわれた第1次調査においては、平安時代の集落跡が確認され、付近には築地遺跡や篠ノ井佃遺跡等の平安時代から中世にかけての遺跡が存在する。今回の調査では、9世紀～11世紀にかけての平安時代の集落とその周辺の生産域を確認した。微高地では竪穴建物跡や溝跡等が、微低地では溝跡や水田鉄分集積層等が確認された。前者は居住域として、後者は生産域として利用されたと考えられる。微高地（居住域）の縁辺部では、鍛冶炉等の鍛冶関連遺構が複数確認されている。鉄滓や鍛造剥片・被熱礫等が出土し、鍛錬鍛冶等がおこなわれていたことが判明した。付近では、炭化物や鉄滓、被熱礫等を包含する大形の土坑が複数確認されており、鍛冶との関連が想定される。

本調査では、篠ノ井南条遺跡周辺において平安時代以降に本格的な土地開発が始まったことが示唆されるとともに、平安時代後期の集落内における鍛冶手工業生産の一端を確認することができた。

なお、都市計画道路川中島幹線道路築造工事に伴う発掘調査は、令和5年度以降も継続して実施する予定となっている。

（長野市埋蔵文化財センター 鹿田奨之）



平安時代の竪穴建物跡(上)と鍛冶遺構(下)

1万年の歴史が眠る丘

飯田市 黒田大明神原 B 遺跡

黒田大明神原 B 遺跡は飯田市上郷地区の土曾川右岸に突出した小高い台地上にある。リニア長野県駅に伴い新設される座光寺上郷道路と大型民間施設の開発が同時に計画されたことにより、令和 3～4 (2021～22) 年度にかけて飯田市教育委員会と長野県埋蔵文化財センターが分担して発掘調査を実施した。

二か年度の調査で、縄文・弥生時代の遺構・遺物が確認された。縄文時代は早期、前期末葉、中期初頭、中期中葉、中期後葉の営みが判明した。遺構は竪穴建物10棟ほか土坑、集石、落とし穴、袋状土坑（貯蔵穴）など多数ある。特筆できるのは、黒曜石石核とチャート剥片が出土した土坑である。ほかに早期の立野式押型文土器や中期初頭の五領ヶ台式並行期土器群、ネフライト製垂飾、異形石器などが目を引く。

弥生時代は中期末から後期の竪穴建物12棟および柱穴群を把握した。注目すべき成果は、柱穴から一括して出土したイネ、クリ、豆類等の炭化物である。これらは当地域の農耕や食生活の実態を解明するうえで大いに期待がかかる。

ここまで多くの段階を内包する集落跡は飯田市域で稀有な存在といえる。また、過去の調査範囲も含め、主要な居住域のほぼ全体が発掘された意義は大きい。長きにわたり繁栄した縄文・弥生の村の姿を明らかにすべく、令和 5 年度に整理・報告作業を進める。

(飯田市教育委員会 春日宇光)



土坑から出土した黒曜石とチャート



石器が埋納された土坑



黒田大明神原 B 遺跡全景 (飯田市教育委員会調査区)

40周年を迎えた長野県埋蔵文化財センターの今までとこれから



専門的知識や経験の伝承 長野県埋蔵文化財センターは昭和57(1982)年設立、本年40周年を迎えた。コロナ禍もあり、センターは大きな節目を迎えている。今まで、岡谷、松塩筑、佐久、長野、中野、上田そして飯田の各調査事務所や支所によって、約400か所の遺跡を調査、133冊の報告書を刊行し、長野県の高速交通網整備等大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査に対応してきた。当初は県からの考古学経験教員にはじまり、その後の専門教員の派遣を経て、今や文化財専門員(行政職)の派遣のみならず、当センターの母体である県文化振興事業団も調査研究員を採用し、専門性を高めつつ、業務の多様化に対応する体制へと変化しつつある。

40年間にわたって培われてきた知識や経験は、県内外の将来の発掘調査の担い手に受け継がれる。考古学等専攻大学生向けに夏および冬に発掘や整理作業のインターンシップを実施し、延べ39名(H30～R4)を受入れ、このなかから調査研究員や文化財専門員として活躍する人材を輩出している。また、従来から小中高の職場体験の受入れ、関連組織の出前講座等で社会と連携してきたが、さらに、センターの発掘調査で得られたあるいは自己研鑽けんさんによる専門的知識や経験を、広く大学等の各種講義でも公開、情報発信している。



インターンシップ生

また、今までも新採後半年間の県文化財専門員の研修派遣や現場対応での市町村職員の短期間研修は受入れてきたが、本年から県内市町村専門職員の長期的な受入れを開始した。派遣職員の資質向上だけでなく、センター職員が市町村職員との連携を学ぶ場としても期待される。

発掘調査急増への対応 リニア中央新幹線などの事業量増については、支所開設や嘱託職員を含む人員増で対応してきたが、いよいよ本格化してきた本年度からは、民間支援事業者を、保護行政や先進県からのご指導・ご教示を得て導入できた。さらに、令和元年台風19号の被災後の千曲川防災事業に伴う大規模発掘等による事業量の急増が見込まれ、全国埋蔵文化財法人連絡協議会等と連携し、本年度、北海道埋蔵文化財センターから職員派遣(2名)をいただいた。今後も、県教委や開発事業者はもとより県内外とも密に連携し対応したい。また、発掘調査についても、夏の暑熱対策や寒冷期の安全対策、確認調査の安全確保や効率化を図るための先進技術(ジオスライサー、レーザー探査等)の導入もはかっている。

センターの今後 専門性の高い調査組織として持続するためには、市民への業務内容理解促進が、不可欠である。本年度から管理部に調査研究員を配置し、管理業務はもとより、現地説明会、マスコミへの情報提供、SNSやホームページによる情報発信・改良等の普及啓発活動にも力をいれている。

長野県内の文化振興を目的とする事業団とも、夏休み考古学教室(施設公開)での考古学とアートを活用した「縄文ワークショップ」事業等で連携強化をはかり、効果的な情報発信や経営改善につながることも期待される。

一方で、発掘調査事業は今後も急増急減することが予想される。安定的かつ高度な専門性を保って事業に取り組むために、普及啓発の事業化、市町村や大学等の発掘調査以外の事業への参画を進め、事業の多角化に取り組んでいる。



活躍する若手職員

従来からの専門研修だけでなく、職員自身の発案による自己研鑽を目的とした研修や視察も計画されている。なお、こうした活動の成果が出前講座、講義、年報(紀要)で公表されるとともに、調査資料の活用、保護さらには調査知識、技術向上へとつながることを願う。

(川崎 保)



国土地理院web地図を加工

信州松本空港から北海道へ向かう便は二種類ある。千歳市^{しんち}新千歳^{とせ}空港行きと札幌市^{おかだま}丘珠空港行きだ。それぞれの空港の近隣に、わかりやすく整備された遺跡と関連施設があるので、紹介したい。移動手段としてはレンタカーをお勧めする。

新千歳空港から車で20分位のところに世界遺産でもある国史跡千歳市^{しゅうてい}キウス周堤墓群、近隣には千歳市埋蔵文化財センターの展示施設がある。縄文後期の遺跡である。周堤墓とは、地面に円い^{たてあな}大きな^{たてあな}縦穴を掘り、その土で縦穴の周囲に土手を造り(周堤)、縦穴内や周堤上に1基～数十基の墓穴を設けたものである。周堤墓の大きさは一般的に10～30m程だが、ここでは50mを超える大規模な周堤墓が群集する。

丘珠空港から車で10分のところに丘珠縄文遺跡が所在する札幌市農業体験交流施設「サッポロさとらんど」がある。縄文時代晩期から続縄文時代にかけての遺跡である。続縄文時代とは本州の弥生時代から古墳時代にかけてで、この遺跡は弥生時代ころである。この施設では遺跡を活用した縄文体験や展示見学も可能である。さらに考古学の展示をご覧になりたい方は、ここから15kmほどのところに北海道埋蔵文化財センター展示室と北海道博物館がある。自動車でも20分前後といったところか。

数年前、北海道の福島町館崎遺跡と木古内町幸連5遺跡から、長野県産黒曜石から作られた石鏃が出土したという報道があった。だが、もちろん北海道にも黒曜石産地がいくつかある。そのうち日本ジオパークにも認定された^{えんがらちよう}遠軽町の^{しらたき}白滝ジオパークを紹介する。2022年12月現在、国宝指定の答申を受けた北海道白滝遺跡群出土品(旧石器)は白滝市街地の遠軽町埋蔵文化財センターで見学できる。

ここでは黒曜石露頭の見学ツアーも企画しており、特に八号沢露頭はみものである。新千歳空港から車で4時間ほどだが、公共交通機関でも行ける。

各遺跡・施設とも訪問時にはHPで最新情報を入手願いたい。

(北海道埋文センター
大泰司 統)



札幌市丘珠縄文遺跡



千歳市キウス周堤墓



遠軽町白滝八号沢露頭

日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」



日本遺産 (Japan Heritage) は、文化庁が認定した、地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーである。2016年度から2020年度までに104件の文化財群が認定された。長野県では2016年に「木曽路はすべて山の中」、2018年に「星降る中部高地の縄文世界」、2020年に「月の都 千曲」と「レイラインがつなぐ太陽と大地の聖地」の4件が認定されている。ここでは、認定から4年を経た「星降る中部高地の縄文世界～数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅～」の活動について紹介してみたい。

● 日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」のストーリー

「星降る中部高地の縄文世界」は、長野県と山梨県の2県14市町村、69の構成文化財からなる。長野県の霧ヶ峰から八ヶ岳かけては、本州最大級の黒曜石原産地がある。そこには縄文時代の黒曜石鉱山があり、日本最古のブランド品は、最高級の矢じりの材料として日本各地にもたらされた。鉱山の麓、中部高地のムラは発展を遂げ、ヒトや森に生きる動物を描いた土器やヴィーナス土偶など、縄文人の高い芸術性に驚かされるとともに、山の幸に恵まれて繁栄した縄文人を身近に感じることができる。詳しくは、日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」ホームページを参照していただきたい。

● 地域の人々が主役となるこれからの文化財保護と活用

日本遺産に認定されてから、それぞれの市町村では文化財の所在や構成文化財の情報発信として、観光パンフや案内板の設置、海外からの観光客への配慮からそれらは英語版も作成した。今までは教育委員会のみでおこなっていたことが商工・観光部局とも連携するようになった。

また、黒曜石、縄文土器、土偶などをキーワードに2県14市町村がそれぞれの枠を越えて共同したツアー、イベントをおこなった。一例をあげれば、長和町で開催されてきた「黒曜石ふるさとまつり」へ14市町村の日本遺産ブース参加やオリジナル御朱印帳を持ち施設をめぐる「三十三番土偶札所巡り」などである。

特筆すべきは、地域の人びとの協力、参画である。下諏訪町の食事処では「黒曜石から揚げ」をメニューに加えた。茅野市などでは土偶の箸置きが作られ販売されている。また富士見町では縄文のラベルがついたお酒まで登場した。数千年を遡る縄文世界はまさに現在の地域の人びとにとっても誇りとなり、宝となってきたといえるのではないだろうか。

● みんなで守る身近にある文化財

日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」で遺跡や博物館を訪れ、縄文人の知恵と文化に触れるとともに、その土地で現代に生きる人びとも触れ合うことで、縄文世界は決して過去の社会ではなく、現代そして未来へと引き継がれていくものだと感じられるはずである。そして自分の住む街も見回してみると、文化財は身近にあり、地域の誇りとなりうるのではないだろうか。ぜひそのような文化財を探して、保護し活用していただきたい。日本遺産の縄文世界がそのきっかけとなれば幸いである。(大竹憲昭)



▲どっちがから揚げ？黒曜石？

◀下諏訪町の黒曜石から揚げ定食

店主の山田賢一さんは、下諏訪町の名産品を模索する中、テレビで下諏訪町の黒曜石鉱山の存在を知り、このメニューが誕生した。

長野県の埋蔵文化財情報誌『信州の遺跡』も今号で20号となった。当センターでは、昭和57（1982）年のセンター発足当初にB5判の情報誌『長野県埋蔵文化財ニュース』を創刊した。『ながのけん埋蔵文化財センター速報』全6号をはさんで、平成15年度からは「しなの」にかかる枕詞を冠した長野県埋蔵文化財センターニュース『みすずかる』を全18号刊行し、埋蔵文化財の発掘調査に関する情報を発信してきた。そして、平成24年11月からは、センターがおこなう発掘調査だけではなく、広く県内の遺跡や文化財の情報を県民の皆さんに身近に感じていただく情報誌をめざし、新たに長野県教育委員会や県内市町村教育委員会の協力を得て『信州の遺跡』の刊行が始まった。

第1号の巻頭では、中野市柳沢遺跡の報告書刊行を報じている。柳沢遺跡は、それまでの信州の弥生時代像を大きく変換させる重要な発見と位置付けられる貴重な遺跡であることはもちろん、弥生時代の日本列島の社会や文化を考えるうえでも重要な遺跡であった。そして、第4号では、松本市教育委員会がおこなった国史跡弘法山古墳を造った集団の集落の可能性のある松本市出川西遺跡の発掘調査成果。第11号では、センターがおこなった塔鉢形合子出土した長野市小島・柳原遺跡の発掘調査成果や、飯田市教育委員会がおこなった全長35mにおよぶ古墳前期の前方後方墳笛吹2号古墳を含む北方西の原遺跡の報告書刊行。第12号では佐久市教育委員会がおこなった弥生時代後期のベンガラが満杯に入った壺が出土した佐久市西一本柳遺跡の発掘調査成果等、県下の様々な発掘調査情報を発信してきた。また、塩尻市の国史跡平出遺跡整備（第2号）、長和町の「黒曜石鉾山展示室『星くそ館』」開館（第17号）や、出土遺物にスポットをあてた情報等、文化財に関する様々な情報も取り上げてきた。

このように10年間にわたり多くの情報を発信してきたが、これからも大きく「窓」を開いて、広くその情報を発信していけるように心掛けていきたい。

（西 香子）

編集後記

「信州の遺跡」第20号をお届けします。「考古学の窓」で本紙の来し方を振り返りましたが、くしくも創刊号同様、上田さんに巻頭を飾ってもらいました。また、飯田市教育委員会の春日さん、長野市埋蔵文化財センターの鹿田さんにも貴重な情報を提供いただきました。

特集として、北海道埋蔵文化財センターから出向の大泰司さんからご当地の遺跡紹介を、大竹さんからは縄文の日本遺産のその後を伝えてもらいました。なお、「埋文ほっと情報」では40周年の節目を迎えた当センターの今後のあり方について提案もありました。

多忙の中、寄稿していただいた皆さんに感謝申し上げます。

（平林 彰）

（一財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

https://naganomaibun.or.jp/ 印刷：奥山印刷工業株式会社

この冊子は、令和4年度 地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。



いであににし
きよはら

やなぎはら
こじま

ふえふき
きたかたにしの はら

にし
ひらいて

いっばんやなぎ
一本柳遺跡の発掘調査成果等、県下の様々な発掘調査情報を発信してきた。また、塩尻市の国史跡平出遺跡整備（第2号）、長和町の「黒曜石鉾山展示室『星くそ館』」開館（第17号）や、出土遺物にスポットをあてた情報等、文化財に関する様々な情報も取り上げてきた。

このように10年間にわたり多くの情報を発信してきたが、これからも大きく「窓」を開いて、広くその情報を発信していけるように心掛けていきたい。

（西 香子）

本号で掲載した遺跡位置

